

浅川智恵子 IBM フェロー

一九五八年、大阪の豊中市で生まれた浅川は、活発で運動神経が抜群の少女だった。将来の夢は、オリンピックに出場することと、体育系の大学に進学すること。近くのスイミングスクールに入って本格的に水泳に挑戦しようと考えていた。そんな矢先、学校のプールで水泳の授業中、顔をプールの壁にぶつけるというアクシデントに見舞われた。

「小学校五年の夏でした。目の下が青く腫れていたけれど、打ち身かなって程度で最初はたいしたことじゃないと思っていました。病院でも、視力が落ちるかもしれないけど問題ないと言われていましたが、だんだんに目がかすんできて、黒板が見えにくくなり、教科書が読みにくくなり、友だちの顔さえも見えなくなってきた、何度も手術して入院ばかり。あれ？ あれあれ？ という感じで中学二年で完全に失明してしまいました」

入ろうと思っていたスイミングスクールも、オリンピックも、体育系の大学もすべて諦めなければならない。中学を卒業したら進学しようと思っていた普通高校にも行けないということがわかった。十四歳の浅川に残された道は、盲学校に入ることにしかなかった。みんなが希望の高校に進学していく四月、浅川は部屋に引きこもっていた。一週間、二週間、三週間、盲学校に行く決心がつかなかったのだ。

「目が見えないということは、もうどうしようもないことなのだという事はわかるんです。でも、**自分**はこれからどうなるのか、自立できるのだろうか、どんな生き方ができるのだろうかということがわからない。きっと盲学校に行くということは、見えないということを物理的にも精神的にもすべて認めることだったんです」

わからないことを抱えたまますべてを認めることへの抵抗が、浅川を内にこもらせた。が、三週間後に盲学校に通うために自ら扉を開けたのも浅川自身である。

「最後に踏ん張ったのは、**このまま家**にいても**何ひとつ動かない**わけで、自分が一歩でも前に進むために残された唯一の道は盲学校に行くことしかないのだったという思いでした。私は、環境への順応性は高い方で、盲学校に行って教室でみんながワーワー騒いでいるのを聞いて、何だ普通じゃないかって瞬間的になじんでしまいました。でも、まさにこの時の経験こそが、今の私の人生や仕事の目標に大きくかかわっていると思っています」

もし、あの時、盲学校に行かなかったらどうなっていたか。その先に道は続かず、今の自分はなかった。

「一歩間違ったら、諦めていたかもしれない。一度立ち止まってしまったら、止まったままになってしまう。諦めなければ必ず前に進む道はあるはずで、それがどんなに大変でも最後までやらないと次の一歩は開けないってことです」

浅川の人生は、この時から一歩を踏み出し続ける姿勢によって創り上げられてきたのである。

友の死を懸命に受け止め、仕事への情熱を燃やそうと決意

を新たにしていた松倉は、四十九歳の誕生日にアナウンス室長から呼ばれた。

「忘れもしない九五年一月二十四日です。若い人に道を譲ってもらえないか、育てる側に回ってほしいと言われたんです。実況のメインから降りてくれということです。目の前が真っ暗になるというか、後ろからいきなり丸太で頭を殴られたというか、本当にショックでしたねえ。さあこれからアナウンサーとしての有終の美を飾ろうと意気込んでいた時に、突然出端（でばな）をくじかれた感じで、その夜から、眠れなくなってしまったんです。そのうち、手がしびれて鉛筆も持てなくなりました。心療内科に通って、薬を飲みながら出勤してました。一番つらかった時期です」

これまで、予め描いた道から外れたことがなかっただけに、外れることに免疫がない。五十歳を目前に初めての挫折を味わうことになろうとは思ってもいなかった。

「頭では受け入れなければいけないとわかっているんですよ。でも、どうしても現実を受け入れがたい。後進の指導をしつつモヤモヤしてたし、中継を聞いていても、私ならそんな表現はしないとイライラする。朝から好きでもなかった酒を飲んで、ひたすら現実から逃げていました」

幫間（ほうかん）とは、もともと遊興の酒間を幫（たす）くる者。幫とは助けるという意味で、お座敷遊びを楽しく盛り上げるために気を配り、人と人、人と酒、酒と酒の間をうまく取り持ち、旦那衆を持ち上げて楽しく遊んでもらうための役目を担う。そこから、男芸者、太鼓持ちと呼ばれることもある。

太鼓持ちというと、心にもないお世辞や追従を言って世の中をうまく渡っていく者という意味にも使われるが、幫間が持つ太鼓は自分のために打ち鳴らすさみしいものではない。あくまで旦那のために自分を殺し、徹底的に相手の思いに寄り添う。

「おべっかだけ言っても、相手は喜んでくれないでしょう。むしろ白けてしまう。気を遣うのではなくて、気を配る。自分も半分は喜びながら気を配る。硬くなってしまうと、わざとらしくなる。空気を読んでより楽しくなるように努める。それが幫間の仕事で、戦前はお客さんに代わって見番と料亭との交渉をして、予算内でどれだけ楽しく遊べるかの算段をするお座敷遊びのプロデューサー的な役目も果たしていたようです。お座敷でお客様の財布を預かって、旦那が気がつかなくても太鼓持ちが気がついて心づけを渡すとかしていたそうです。無駄なお金を使わず、必要なお金を忘れないため、そこまで信頼関係があったんですね。私の頃は、もうそこまでの関係はありませんでしたけど」

バブルの頃は、サラリーマンも大挙して料亭で宴席を張り大いに豪遊はしたものの、会社の接待費では仕事の延長、仕事仲間同士の役得感覚、取引先の接待など。景気はいいけれど粋を競う世界とは似て非なる遊びに明け暮れながら、花柳界もバブルに踊った。

幫間の世界のどこに魅かれたのかという問いに、米七は「粋を感じたから」と答え

る。

「粹な人とはどんな人だと聞かれたら、祝儀袋を持って歩いている人って言うことにしているんです」

持ち歩いた祝儀袋を粹に使えるには、道楽を極めるしかないのだろう。道楽は文字通り道を楽しみ尽くし、何かを生み出すことはない。今は、道楽は趣味に変わった。

確かに盆栽は、植物の生命力と人間の意志との長い戦いの結果に見えることもある。女性で盆栽家で母親でもある山田自身は、どう感じているのだろうかと思なった。

「一番先端の芽が一番勢いがいい。それを切ると、下の芽が動き出す。優位だった先端から、他の芽に優先権を譲る。最初の芽が消えても、二番目三番目の芽を出せばいい。へこんでいる時に励まされることがあって、面白いです。それに盆栽って完成形がないんですね。所有者が死んでも盆栽は生き続けます。木が老いて大事な枝が枯れるとバランスが崩れ美術品としての価値は下がりますが、そこから再び価値を高める努力をする。三百年生きた盆栽は、十人以上の人によって作られた総合芸術作品であって、まだ完成途上なんです」

川崎和男

「実はね、三度目にあの世からこの世に戻ってきた時に、ワクチンに取り組もうと思ったんです。敗血症でまた死にかけてね。意識がなくなる時ってすごく気持ちがいいんですよ。祖父が出てきて、もう来るか？ って言うんで、もういいかな行こうかなと思ったら、僕が二十一歳の時に死んだ母が出てきて『ダメよ！ まだやり残していることがあるでしょ』 って言った。耳元で若いドクターが『阪大病院の天井どうするんですか』とか怒鳴っている声も聞こえて、ふと意識が戻る。ストレッチャーで運ばれる時って天井しか見えないのに、貧弱な天井なんです。そういえば天井をデザインしたいねっていつも言ってたっけなと思出す。あ、まだあっちに行けないなって思うと、吐き気に襲われて、次に寒気がきて、今度は熱がガーッと上がって、もう一回気を失う。で、気がつくとも二週間ぐらいたってる。いつも同じパターンです。この世に戻ってくるって辛いんですよ。戻ってくる度にハッと自分の中でやるべきことに気づくというのかな。今度も、ワクチンだ！ って准教授を呼んで宣言して、スケッチを描き始めた」

あの世への道案内ができるよと笑う川崎は、これまで何度も命の危機にさらされている。最初に死線をさまようことになったのは、二十八歳の時の交通事故だった。

幼い頃、作家志望だった川崎は、東大と防衛大学校以外への進学は認めないという父を、医学部を希望することで妥協させ、浪人の末に金沢美術工芸大学に進んだ。

当然ながら父親は怒ったが、ひとり息子の適性を深く理解していた母は「赤い血を見て一生暮らすより、赤い絵の具を見て暮らす方があなたには絶対に似合っている」

と父との間を取り持ちながら応援してくれた。

美大でデザインの才能を開花させた川崎は、東芝に入社。オーディオ機器のデザインを手がけ、順調にサラリーマンデザイナーの道を歩き出していた。仕事は面白く、上司にも恵まれ、バリバリと働いていたそんな時に、**帰宅途中に乗っていたタクシーが追突される**という事故に見舞われたのである。一命は辛うじて取り留めたが、**脊髄を損傷したことによって医師から一生歩けないという宣告を受けた。**

「最初は実感がないというか、車椅子もあるし、何かズルもできそうだしって楽観してたんです。でも、企業留学が決まっていたのに、それが流れて、同期の人間が明日から留学するって言ってきた日は病院で泣きました。なんで自分はこんな目に遭っているんだろう。何でだろう何でだろうって、仏教書や宗教書を読んだりもしてましたが、**どうしても現実を受け入れられなかった。**でも、ある時、何度もお見舞いに来てくれた上司が帰る後ろ姿を見送っていて、もしあの人が自分と同じように入院したとして、自分は親身になって何度もお見舞いに行くだろうかって思ったんです。きっと行かないだろう。自分は、あの人のようなやさしさのない人間なんだ。だからこんな事故に遭ったんだ。しょうがないんだなって思った時、これからこの体で生きて行く**人生が受け入れられたように思います**」

「四十七歳の時でした。四十六歳の時に、**事故の後遺症で大動脈痛が石灰化して心臓発作が起き二度目の死線**を乗り越えたばかり。四十七歳で亡くなった母よりも長生きするんなら、これからは生き方を変えようと思って、大学人になりました。二億円の光造形システムを整備してもらって、メビウスの輪とかクラインの壺といった想像上の造形を現実に作り出すことに成功しました。それで何が可能になるのかとアメリカの学会でのプレゼンで聞かれ、とっさに人工臓器と答えちゃった。どの臓器だと重ねて聞かれたので、心臓だって言って、それなら来年作ってこいということになっちゃってね」

そこから猛烈に心臓に迫り、約束通りに人工心臓のデザインモデルを造り上げ、その功績が認められて医学博士号を取得した。

米村でんじろう

年間を通じ全国各地で催される米村のサイエンスショーは、千人を超えるキャパシティの大会場を超満員にする。ペーパーブーメランを会場に投げ、丸い穴のあいた段ボール箱の空気砲を撃ち、シャボン玉を自在に操り、会場を埋めた親子もろとも笑いと歓声と驚きの渦に巻き込む。そして、その原理を面白おかしく語ってまたまた客を沸かせる。

「テレビもイベントも、たくさんの方が関わって番組やショーを作り上げていくんだけど、みんなそれぞれの役割を心得ながら接しているところがある。挨拶して、段取り確認して、お疲れ様って別れて、それ以上ではない。**沢山の人と関わってはいても人間的なつき合いは薄いところあるんです。**時には意外と寂しい人生だなあとと思うこと

はあるんですよ。友だちいないし、人づき合い悪いし……でもずっとこのままだし」

この状態を客観的に見ると寂しい人生ということになるのだろうが、米村自身は寂しいと思っていない。むしろ、固定化されて深く関わり合うより、不特定多数の人と一期一会の出会いを重ねていくことが性にあっていて、米村にとって快適な人との距離感を保ちながら、科学を楽しんでもらう体験をたくさんの人と共有する時間を引っ提げて旅から旅へと流れていく。

井村雅代

メダルの可能性をもつ開催国の蔣姉妹による演技を見守っていた中国のヘッドコーチ・井村雅代は、一瞬自分の目を疑った。中国にメダルをもたらす唯一の期待の星が、ありえない致命的なミスをしたのである。

「挑戦者が練習でもしないミスをしたら勝てるわけない」

なんでや？ という思いが渦巻き、ミスした蔣姉妹も自分自身も許せない激しい感情が井村を襲っていた。これでメダルは消えた。中国の代表コーチに招かれた井村の使命は、とにかくメダルをひとつ取るということだった。使命が果たせなければ、仕事をしたことにならない。このままでは日本に帰れない。そんな思いが駆け巡った。

が、次の瞬間、うちひしがれてプールから上がってきた蔣姉妹を、井村は満面の笑みで迎えている。演技を終えて、プールから上がるまでの時間は一分足らずである。

「あれは一世一代の作り笑いやったんですわ。怒っても結果が変わるわけじゃないから無駄や。明後日には蔣姉妹も出るチームの演技がある。可能性が全くないわけではない。それなら残された時間にすべきことは何か。蔣姉妹もショックを受けているけど、チームのメンバーはもっとショックを受けている。これからどんどん怖くなる。震えがくるほど怖くなるはずだから、まずは次に向かえる気持ちに立て直すしかない。そのために自分がすべきことは何かってことです」

呆然とする気持ちを誰よりも先に自力で回復させ、とっさにこれだけの判断をして作られた満面の笑みだった。

小柳栄次

それから五年後、社会人大学院制度が始まった。翌年に、筑波大学が理工系の修士課程を募集したのを知って、四十一歳の小柳は再びチャレンジ。今度は、休養というわけにはいかないから教壇に立ちながら勉強をすることになる。

毎日午後三時に授業が終わると、高校（大船）から電車で東京駅に行き、そこから高速バスでつくばに、さらにバス停に置いてあるバイクを飛ばし、大学に着くのが午後六時頃。それから十時頃まで講義を受け、さらに研究室で自分のテーマの研究を続け、アパートに帰るのは深夜。朝は、五時十分発の高速バスで東京駅、そして始業時間までに高校に出勤するという毎日。そのすさまじい生活を楽しく感じるほど、ロボットの研究開発は面白かったと言う。